S-4 避難行動と避難生活を如何に伝えるか

—山田町「震災記録誌」のねらい—

岩船昌起（鹿児島大）

【はじめに】演者らは，2011 年東北地方太平洋沖地震による津波災害に関して山田町震災記録誌『3·11　残し，語り，伝える　岩手県山田町東日本大震災の記録』（以下，「山田町震災記録誌」）を制作する作業を分担した。記録誌担当の佐藤氏からは，東日本大震災を「学術的な知見に基づき検証」することを求められた。現地調査・資料収集活動を一年弱で行い，さらに一年で断続的に執筆し，半年で校正作業を丹念に行い，本年 5 月に刊行した。演者らは，第 1 章「残す」第 1 節「震災の概要と被害状況（P34～59）」の本文と第 3 章「伝える」第 1 節「津波の来襲と避難（P134～225）」の 116 頁分を担当した。これは，目次では 2 節のみだが，272 頁に及ぶ「山田町震災記録誌」の中で凡そ 4 割強に及ぶ。

【山田町震災記録誌の目的】国の復興交付金を財源に約 7000 冊発行し，大半が町民 1 世帯に 1 冊配布予定とされた。「津波から命を守る」つまり「町民一人一人の防災力の向上」を目的とし，山田町での大震災の経験を将来世代に繋ぐことを強く意図している。また他地域の人びとが災害発生の様相を具体的に知るための整理された手がかりともしたい。そこで，演者らが担当する第 3 章「津波の来襲と避難」では，発災・応急期の「避難行動・避難生活」を対象に，パーソナル・スケールでの時空間現象の把握を基本「通念」とした。

【第 3 章「津波の来襲と避難」での工夫】第 3 章では，津波の発生要因や動態と主に人間にかかわる被災の過程，およびその間に介在する多種多様な事象のうちから被災の鍵となりそうなもの，そして避難所での人口動態や食生活について，独自の調査結果，調査されているが未整理の資料，すでに公表されている情報等を，出所を明示して組み合わせ，できる限りの解析と妥当な解釈を加えて，オリジナルな図表と文章で表すことを心がけた。例えば，「避難行動」に限れば，①直接被害を与えた自然現象の種類や規模がどのように変化したか，②逃げる主体である人間がどのような状況下でどのような過程を経て移動したか，③その過程の中で何を見聞き感じて何を考え判断して行動につなげたか，が分かるようにした。そのため，地震に遭った時の家屋の間取りや屋敷の配置を 1m 程度のスケールで図示し，避難行動の経路を具体的に地図に記して，本文と対照できるようにした。

【学校教育・社会教育の教材・資料等として応用性も意図】山田町震災記録誌は，“ジャーナリズムの視点”から執筆された「親しみやすい記録」もあり，「山田町での東日本大震災」を知るには，取り掛かりとして「上質な資料」であろう。また，演者らが執筆した第 3 章「津波の来襲と避難」については，学術的な文章にあまり慣れていない方々には「読み難い」と感じる場合もあろうが，例えば，これを小中学校の教員が教材として活用し，授業の中で避難行動の事例一つを丁寧に紹介するだけでも，「防災教育」の授業として十二分な内容を展開できるであろう。また，「被災地」目的で訪れる旅行客や修学旅行の児童・生徒に対して，盛土によって大きく変わった現地で，津波による被災の状況，避難行動の事例，避難所での生活等を紹介する「教育旅行」の基礎資料にも活用できるであろう。

【おわりに】東北に根差す我々地理学としては，「町民一人一人の防災力の向上」という目的を果たしつつも，今後の山田町の発展に資する財産を提供できたと考えている。